甲状腺外科草子 123

古文復習：新古今の秋

杉野　圭三

新古今和歌集の「秋」には名歌が多い。

秋歌

吹き結ぶ風は昔の秋ながらありしにも似ぬ袖の露かな（312，小野小町）

萩　　おみなえし

萩が花真袖にかけて高円の尾上の宮に領巾（ひれ）**振るやたれ**（331　顕昭法師）

秋萩の咲き散る野辺の夕露に濡れつつ来ませ夜は更けぬとも（333，人麻呂）

（こんな歌をもらったら必ず行くでしょう！）

たれをかもまつちの山のをみなへし秋と契れる人ぞあるらし（336，小野小町）

（真土山のおみなえしは誰を待っているのか、秋に逢う約束の人がいるらしい）

朝顔（恋しぐれ）　　すすき（富士五湖）

山がつの垣ほに咲ける朝顔はしののめならで逢ふよしもなし（344，貫之）

（山住みの人の垣根に咲く朝顔は東雲の時でないと会えない）

さを鹿の入野のすすき初尾花いつしか妹が手枕にせむ（346　人麻呂）

次は誰もが知る「**三夕の歌**」で解説不要。

さびしさはその色としもなかりけり真木立つ山の秋の夕暮れ（361，寂連法師）

心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ沢の秋の夕暮れ（362，西行法師）

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ（363，藤原定家）

村雨の露もまだひぬ真木の葉に霧立ちのぼる秋の夕暮れ（491，寂連法師）

百人一首のこの歌も入れて「四夕の歌」かな？

忘れじな難波の秋の夜はの空こと浦に澄む月は見るとも（400，宜秋門院丹後）

（歌合わせで、判者の藤原俊成が「こと浦にすむ、珍しくをかし」と評価、有名となり、「こと浦の丹後」と呼ばれるようになった）

秋風にたなびく雲の絶え間よりもれいづる月の影のさやけさ（413　左京太夫顕輔）

さむしろや待つ夜の秋の風ふけて月を片敷く宇治の橋姫（藤原定家　420）

秋の色は籬にうとくなりゆけど手枕なるる閨の月影（432，式子内親王）

（秋の色は籬から遠のいたが、閨に差し込む月の光は手枕に親しむようになった）

み吉野の山の秋風さ夜ふけて古里寒く衣打つなり（483　藤原雅経）

紅葉（宮島,2024）　　白菊

霜を待つまがきの菊の宵の間に置きまよふ色は山の端の月（507，宮内卿）

きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣片敷きひとりかも寝む（518　藤原良経）

古里は散るもみぢ葉に埋もれて軒のしのぶに秋風ぞ吹く（533　源俊頼）

新古今では菊と紅葉の歌が意外と少ない。

参考資料：新古今和歌集（ビギナーズクラシック）、新古今和歌集（角川ソフィア文庫）,Wikipedia、

（　一甲状腺外科医の徒然なる随想　）

2024 年 12 月 19 日